

中山間地域における圃場整備を契機とする農業生産の多角化への推進要因
 Promotion Factors of Diversified Farming through Land Consolidation Project
 in Hilly and Mountainous Area

○吉村亜希子, 石田憲治, 坂根勇, 原口暢朗

YOSHIMURA Akiko, ISHIDA Kenji, SAKANE Isamu and HARAGUCHI Noburou

1. はじめに

圃場整備事業は生産基盤の整備を通じた生産向上を目的として行われてきたが、平成になってから大区画圃場整備とともに担い手への農地利用集積の促進が事業として求められるようになった。その後の事業では基盤整備事業と一体的に実施されるようになり、事業の効果はハード的な側面のみで無く、これを契機としたコミュニティでの集落営農の導入や、農業生産の多角化などといったソフト的な側面での諸効果をもたらしている事例がある。著者らはこれまで平地農業地域に着目し、文献調査より圃場整備を契機として農業生産の多角化に発展するプロセスの検討を行い、集落等における農業生産の多角化を推進する要因は、①合意形成過程を通じた農家間のつながりの強化、ならびに②農作業の省力化による人的・時間的余裕の確保、に集約されることを明らかにした¹⁾。しかし、中山間地域では特に要因②に関して、その地理的条件から推進要因にはなりにくく、他にも推進要因があるのではないかと推察される。このため、本調査では文献を中心とした事例調査に基づき、平地農業地域と比較し、中山間地域における多様な条件下での農業生産の多角化を推進する要因を明らかにする。

2. 調査方法

圃場整備地区報告の文献²⁾から、中山間地域における圃場整備を契機として農業生産の多角化に発展した事例地区を選択し、各地区に共通するプロセスの抽出を行い、その推進要因の検討を行った。

3. 検討結果

1) 農業生産の多角化へのプロセスの考察

文献調査より、中山間地域で圃場整備を契機として農業生産の多角化に発展している地区の一般的なプロセスについて整理し、観光資源を用いて多角化を推進する観光共存型と農地の集積を行い集団的に転作を行う事で多角化を推進する土地利用型 2 つの型に分類した(図 1,2)。

事業の計画段階では平地農業地域に比べ、現状での危機感が大きく、入念な話し合いが行われており、地域に対する共通認識を持ち、事業終了後の集落ごとの営農の多角化への推進要因になる。整備実施の効果は現状の狭小区画の区画整備や山間部の水路・道路の整備が行われる事による農作業の省力化があるがこれは主には現状農地の維持の要因となっているが、平坦農業地域ほどではないが推進要因となる。観光共存型では推進要因に加え、景観等を生かした整備により新たな観光資源を創出し、交流事業を行うことにより余剰の労働力を投入して多角への推進要因となって居る(図1)。土地利用型では地域の合意形成のもと、農地集積を大胆に行うことで作業の省力化をはかるとともに集団転作を行い、転作物物を特産化することで多角化の推進要因となっている(図2)。

2) 事例地区での調査分析

①観光共存型地区

○府 K 地区: 水稲単作、都市部へは車で 30 分程度に位置し、地区内に美しい景観の棚田があり、また水利施設が文化財的にも評価されることから棚田部分は面整備を行わず道路整備のみを行い、他では圃場整備を行った。圃場整備で確保された人的・時間的余裕を生かし、棚田農園を運営して都市との交流を行うとともに、地区内に直売所をもうけ、圃場整備実施地区で生産した野菜/加工品の販売を行っている。

(独) 農研機構 農村工学研究所 National Institute for Rural Engineering (NARO)

キーワード: 圃場整備事業 多角化 中山間地域

N 県 H 地区：水稲と野菜の複合経営地区、都市部へは車で 1 時間程度に位置しており基盤整備の際に地力増進を目的として、集落としてコスモスの集団栽培に取り組み、土作りの効果に合わせて都市部への観光資源としての効果が発揮され、交流を行うとともに、もともと行われていた野菜栽培で特産物作りを行っている。

観光共存型の地区はいずれも都市近郊に位置する地の利を生かし、圃場整備による新たな観光資源を交流の場として活用することが営農の多角化の推進に重要であると示唆される。

②土地利用型地区

O 県 K 地区：水稲と畜産の複合経営地区で、谷筋ごとに圃場を集約し集団的に、放牧・転作を行うことで農作業を大幅に軽減し、省力化による余剰労働力で転作作物を特産化し加工販売を行っている。

A 県 E 地区：水稲と野菜の複合経営地区で、営農組合を設立して農地を集約し 1ha の大区圃場を導入することで農作業の省力化を行い、転作に向けた排水対策を行った上で集団転作を実施し転作作物を特産化し加工販売を行っている。

土地利用型の地区では、大胆な農地の集約のもとで集落営農を行うことで中山間地域では発揮しにくい農作業の省力化効果をあげ、余剰の労働力を生み出し、集団転作により転作作物を特産化するなどの営農の多角化の推進要因となることが明らかとなった。

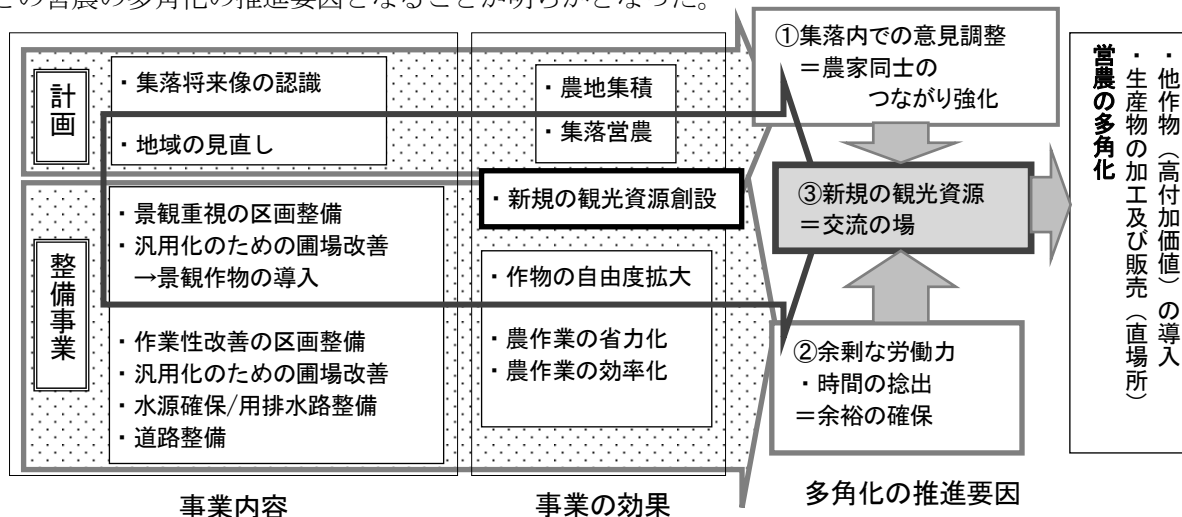


図 1. 圃場整備を契機とする農業生産の多角化へのプロセスと推進要因（観光共存型）

Fig.1 Process and promotion factors of diversified farming through land consolidation project (a type of sightseeing coexistence)

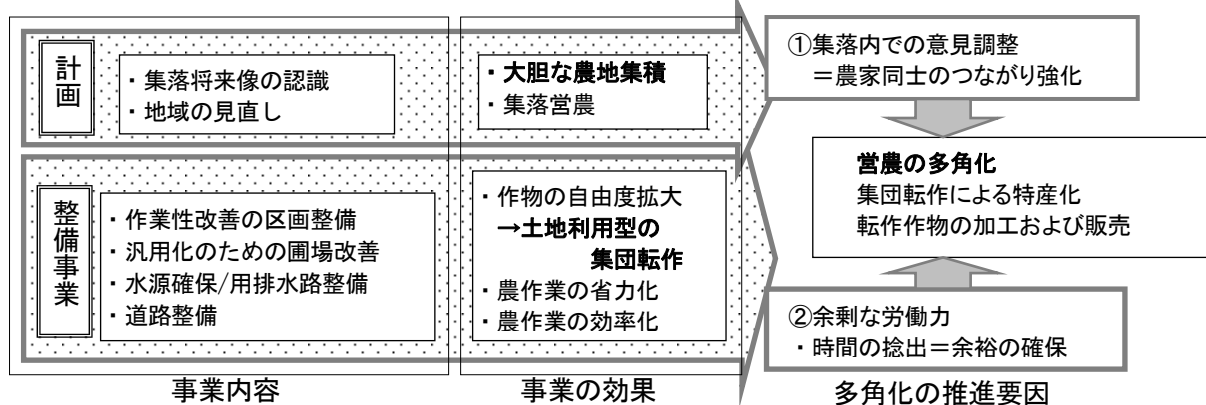


図 2. 圃場整備を契機とする農業生産の多角化へのプロセスと推進要因（土地利用型）

Fig.2 Process and promotion factors of diversified farming through land consolidation project (a type of land use)

※) 圃場と土壌（日本土壌協会出版）1990～2011 の中から圃場整備についての報文のうち、営農の多角化についての報告がある物を抽出して調査対象とした。

引用文献：1)吉村ほか(2012), 圃場整備を契機とするコミュニティを基礎とした農業生産の多角化, 関東支部講要集, 112-113